中国社会の表と裏に接して
―世界第二の経済大国に疑問―

軍事アナリスト　西村金一

はじめに

　中国については様々な見方・分析があります。例えば、壮麗な建物が立ち並ぶ北京の大通り、言い換えると目立つところだけがすばらしい、まさにショウウインドウのような大通りだけを見た人とその陰に隠れた裏通りや田舎を見た人では、見方が全く異なります。また、中国が発刊する統計年鑑データを見る人、中国人民網などの公式見解を重点に見る人、中国との事業を展開しているために中国に気を遣わなくてはならない人では、それぞれの発言は異なり、分析の結果は多様になります。

　私は、1994 年に上海と北京、1995 年に中国と約 5～7km 離れて向かい合う台湾金門島に行きました。2008 年から 2011 年までは、自衛隊定年退職後、日本の最大のシンクタンクでの仕事を通じ、中ソ国境の綏芬河・東寧、旧満州と呼ばれた東北地域の伊春・北安・斉斉哈爾・鶏西・瀋陽・牡丹江・哈爾浜・佳木斯、北朝鮮との国境に近い琿春・延吉・通化、夏には 40 度以上が毎日続く唐山・天津・保定・石家荘などの北京付近、上海の隣で美しい西湖がある杭州、海鮮料理が美味しい南の広州などを訪問しました。（図参照）

　当時は、１ヵ所に１週間ほど滞在しました。仕事に関する事と市民生活とに関心を持って、ショウウインドウの表通りばかりではなく、市民生活と直接関係する薄汚い裏通りも見ました。さらに中国長期在住の友人に聞いた事なども整理し、中国に関する知識が豊富なスタッフとともに、統計データを参考に『手にとるように中国がわかる本』（かんき書房）を出版しました。

　今、改めて、中国国家統計局のデータ、ヒアリングしたこと、私が現実に接したことを合わせて、中国の社会・国民性・軍将兵の現状を分析してみました。以下、尖閣問題で過激な行動をとる中国人に疑問？
監視される社会に個人の自由は存在するのか？
中国人は桁違いにひどい汚染に激怒しないのか？
中国人は中国で売っている商品を信用していないのではないか？
立派すぎる建築物や物は何のためのものか？
中国では賄賂を出すのが当たり前か？
会社の内部にも共産党社会があるのか？
中国でとんでもないトラブルに遭遇するのは何故か？

などの疑問について紹介し、考察します。そして、これらが中国に対する疑問を解決する糸口になり、中国研究の一助となればと思います。

1　尖閣問題で過激な行動をとる中国人に疑問？

中国では、油断していると大金を請求され、トラブルに遭い、騙されそうに感じることがある。また、日本の評論家の中には、反日感情を剥き出しにしたデモの映像へのコメントで、「江沢民元国家主席の反日教育の影響によって、日中間の問題が生じるとこのような過激なデモに発展する」という人がいる。

私も、一部の中国人には、ちょっとしたことで人間関係を急速に悪化させてしまうような感覚を持つこともある。しかし、私が見た限り接した限りでは、生活するのに一生懸命になっている中国人が、尖閣問題であのような過激な行動に走るのかと疑問が生じた。

それは、中国人に実際に会って、中国人に親しみを感じることがあったからだ。

その一つ。仕事で、中国軍将兵と一緒に、暑い日も寒い日も化学防護服を着て、日本軍が残したとされる遺棄化学兵器（砲弾）の応急処置を行った。防護服を着ると息がしづらい。また、夏は蒸し風呂のような暑さで本当に疲れる。そのような中で、若い将校と作業のやり方を調整し、若い兵士とも一緒になって汗水を流して砲弾の処理をした。そして、作業が終わって防護服の面覆いを外した時には、助け合えたという気持ちから、互いにお疲れ様の笑顔になれた。夜の宴会では、乾杯して飲み干すのが習わしだ。しかし、私が酒を飲めないことを知ると、「無理して飲まなくていいよ。」と言ってくれた。

現場の中国の人たちと接すると、最初はとっつきにくい感じがあるが、お互いが笑顔になれる打ち解けた関係を作ることができた。中国人のほとんどは温厚で親切な人だと思った。

二つ目は、20 年前に上海伊勢丹の公衆電話のところで、航空チケットを忘れた時の事である。航空チケットを見つけた子供と母親は、近くの店員に日本人がどこかにいないのかを聞いてくれて、レストランにいる私を見つけ、チケットを渡してくれた。その時の母子の笑顔は、とても新鮮で暖かかった。日本に帰れなくなるところを、中国人の親切な母子に助けられた。

三つ目は、哈爾浜と斉斉哈爾の広場での社交ダンスで交流した時の事だ。中年男女が普段着よりもちょっとおしゃれをして、ダンスシューズを履き、中国式モダンダンスとラテンダンスを踊っていた。哈爾浜では、踊る人が 200 人くらい、ギャラリーも同数。踊りは、日本のものと少し違う。私は当時、中国語を話せなかったが、ダンスが得意だったこともあり、踊りに参加した。通訳にお願いして、「日本人だけど踊りに加わってもいいか。」と尋ねると、最初はなんとなく怪訝な顔をされた。ある積極的な女性が、興味があったのか踊りましょうと

斉斉哈爾のダンス風景

誘ってくれた。私も競技ダンスA級だったので、そこでは目立つ踊りができた。そうすると、多くの中国人女性が誘ってくれ、夜の楽しいダンスタイムを過ごすことができた。

斉斉哈爾では、ダンス会長に日本からのお土産を渡したところ、「日本人が来て踊ってくれた記念に飾って置きます。」と言ってくれた。その間、冷たい反日感情などは全くなく、暖かい思いやりと親しみを感じた。

以上のことから、尖閣問題に関するデモに参加している人の多くは、一部の過激な人たちや党関係者からの指示で行動している人なのではないかと思うのだ。

2　監視される社会に個人の自由は存在するのか？

最初に国の仕事で中国に行った時、私が単独行動をする時に限って、いろいろな不思議なことが起きた。北京の喫茶店に入ると、私に続いていかつい顔の中国男性が入ってきて、私の真向かいのテーブルに座った。通常は不思議ではないが、私以外のお客さんがいないのに、私の顔が見えるように真向かいのテーブルに座った結果、お互いに見たくない顔を見ることになった。私が2時間ほどそこで本を読んでいたのだが、その間、ずっとその席にいたのだ。按摩に行った時は、私に続いて入ってきた中国人がいた。その人は、マッサージを受けた気配はなくロビーにずっと座っていたらしい。ホテルのレストランの価格表を真剣に見ていた時、高級ホテルに宿泊するような服装ではない中年の親父が近づいてきて、「おいしいものがありますか。」と聞いてすぐにさっさと歩いて行った。聞くのであれば、メニューくらいは見るだろうに。ダンスのシャドウトレーニングをしていると、突然怪しげな男が私を見に近づくこともよくあった。

これらの行動は、とても自然な行動とは思えない。つまり、「私を見張っているぞ」というシグナルではなかったかと思う。

日系のホテル内でも、廊下の四隅、エレベーターホール、エレベーター内に監視カメラが多く設置されている。日本人がいかがわしい女性を部屋に引き入れて、公安に踏み込まれ逮捕される事案がたまにあるが、監視されているので当然だと思う。

3　中国人は桁違いにひどい汚染に激怒しないのか？

(1)　大気汚染

私は1994年、今から約20年前、北京にある国家環境保護局にヒアリングに行った（写真)。海外の工場が中国に進出し始めた頃で、火力発電所や小さな工場から出る煙、車の排気ガスにより、空気や川の水が汚染され始めていた。北京の高層ホテルからは、遠くの煙突から煙が大量に排出されて流れていくのが見えた。上海の発電所の付近では、会社研修をしていた日本の企業経営者が、発電所の煙の硫黄成分

で、「目が痛い、硫黄の臭いもすごい。」と言って、そのひどさに驚いていた。当時、中国に進出していた 10 数社の外国企業を見て回ったが、煙を出している会社は一つもなかった。

20 年後の今、あの時の大気汚染とは比べものにならないほど強烈な大気汚染になった。北京空港に降りると、目は痛いし鼻も詰まる。太陽を直視しても眩しくない。夜、市内のネオンはぼんやりとかすみ、星は当然見えない。

大気汚染の指標を表す PM2.5 のデータを見ると、北京 2013 年 2 月の春節の全国 74 都市の大気汚染状況は、平均数値が 1 立方メートルあたり 426 マイクログラム、日本の環境基準 35 マイクログラムの約 12 倍だ。大原では 1,100、天津では 577、石家荘では 527 を記録した。日本の環境基準の約 15～16 倍だ。大気汚染は、脱硫装置を付けていない小さな工場から出る煙、発電所から出る煙、各家庭の石炭を燃やす煙、そして車からの排気ガスが、大きな原因になっている。

大気汚染の大きな原因の一つであるガソリンの硫黄含有量の基準値が、中国一般（国3）と称するガソリンでは、150ppm 以下となっている。ユーロ 3 は 10ppm で、中国で使用されているものは、ユーロ 3 と比べて 15 倍だ。そのデータは、PM2.5 の日本の環境基準と中国北京の大気汚染現状の比較データに類似している。中国政府は、ガソリンの環境基準について、5 年後の 2017 年末に日本や欧州並みに引き上げる方針を決めて、石油関連企業にも品質向上の指示を出した。その基準が守られないと、北京まで 70 キロに近づいている砂漠化とともに重大環境問題になる。

不思議なことに、北京に何度も行っていると、馴れて大気汚染が気にならなくなる。中国人民は、20 年間もの時が過ぎて汚染したことで麻痺しているのではないか。無意識の内に犯されていることに気がついていない。2013 年 4 月現在でも、北京市内を歩いていて、マスクをしている中国人はほとんどいない。マスクを付けている人がテレビで報道されるが、それはたまにマスクしている人を狙って撮影したものである。中国のマスクも布で作ったもので、PM2.5 には全く役にたっていない。「PM2.5 に効果があるマスク」と表示されていても、外装は立派でも中身のマスクは偽物つまり、PM2.5 に効果がない。

スモッグでかすむ天安門広場

（出典）APニュース2013年1月29日

北京の国家環境保護局は、20 年も前に大気汚染が問題になっていることに気付いていたのに、中国人民には報道せず、警告も与えていなかった。私や同僚は、強烈な大気汚染だと感じていたが、中国人の友人や通訳も大気汚染ではなく、「北京特有の霧」だと言っていた。北京市民の間ではそれほど大騒ぎになっていなかったのだ。最近 PM2.5 の計測数値が公表され、やっと気づいて問題視し出した。

これから北京では、大気汚染による病気が顕著に現れてくるであろう。習近平国家主席も同じ空気を吸っているので、人民だけの問題ではない。

大気汚染は、生命の危険性もあるのだが、北京の市民はデモをやってはいない。北京政府や企業を相手取り、デモの呼びかけもない。中国人は、北京の大気汚染 PM2.5 の影響を受けてどれほど耐えられるか、再び人体実験の被験者になるつもりなのか。

中国政府が環境基準を上げる、すると燃料費が上がる、電気代が上がる、製品の値段が上がる。環境はよくなるが、外国の企業が中国から離れて行く、中国の経済が減速するなどの流れになる。

日本でも PM2.5 が流れて来ると非常に心配されているが、日本の九州に流れてくる量は、中国北京と比較するとさほどではなく人体に影響はないと言われる。日本人の身体に影響がある前に、中国人が病気になる。日本にも悪影響があるからといって技術支援をすべきといった声があるが、浄化装置などの支援は、対中国に対する国家戦略の一つのカードとして利用すべきだ。

(2) 水汚染

中国広東省「南方都市報」によれば、『中国国内の 64%の都市で「深刻な地下水汚染」が発生しており、総延長 14 万キロに上る河川の約 40%の水域が重度の水質汚染に見舞われている。大気汚染に続く環境問題として浮上してきた』と報道している。

政府系ニュースサイトの「中国網」は、南方都市報の記事を引用した上で、山東省で一部の工場が有害物質を含む廃水を地下に高圧で注水したことが発覚し、地元当局が調査に乗り出したと伝えた。中国青年報は河川の水質汚染源として、工場廃水、農薬など有害物質を含む農村の排水、都市の生活排水を合わせて「三大元凶だ」と指摘している。

米国、欧州、マレーシアやタイのホテル（地方も含め）では、水道から出る水は飲めないが透明である。私が何度も宿泊した中国の各市の五つ星ホテルの水は、洗面所の洗面台に水をためたり、風呂桶にお湯をためたりすると、薄茶色だ。コップに入れると泥が混じっている時もある。五つ星のホテルでこのレベルだから、地方の市民の水はもっと悪い。私は、一晩中嘔吐と下痢の苦しみを味わったことがある。それ以降、中国の水道水は飲まない。その水で歯も磨かない。

町を流れる河川では、ゴミが堆積している。川辺や流れている水も汚れてくさい。流れがない川は、自然ではない絵の具のような水色あるいは緑色であることもある。

中国は、世界の製造工場になったが、ゴミ処理能力が小さいために、ゴミは自然の川に流す。河川が汚染され、その水を飲む中国人の生命に大きな影響を与えるようになった。

このような河川の汚染では、その河や近海では魚が捕れなくなる。汚染された魚を長期間食べていると病気になるだろう。中国の漁船は、これから日本の尖閣諸島付近、韓国領海付近、日本海にまで進出する。そして増加する。中国の河川の汚染対策をやらない限り、中国漁船は、中国近海から離れ、周辺諸国の領海に強引に入ってきて漁業活動を行うことになる。

河川に流されたゴミは、大河の流れに乗って日本にも、世界にも流されていく。一部の科学者は深刻に受け止めているが、人民の感心は薄いようだ。

中国の金持ちは、ペットボトルの水を飲むが、その 1/3 偽物と言われている。

中国人はこのように桁違いにひどい汚染になぜ激怒しないのか疑問である。

4　中国人は自国の商品を信用していない？

北京のメイン通りにスポーツウエア「ナイキ」の店があった。ポロシャツが約 5,000 円で売られていた。行くたびに店の中をのぞいてみたが、買っている人はほとんどいない。その店は、2011 年の春には閉店した。北京でタクシーの運転手の月給が 3 万円ちょっとだから、一般人民が 5,000 円もするポロシャツを買うわけがない。

他にも、アディダスなどの有名ブランドの本物の店があるが、お客はほとんど入っていない。それなのになぜ店が経営できるのか不思議な感じがする。

中国人が着ているナイキやアディダスのシャツの大部分は、偽物のシャツだ。その偽物は、路上や小売店で売っている。例えば中国製の靴下は、すべてナイキ、アディダス、グッチなどの外国メーカーのマークが入っている。中国人は、それらが商標ではなくて、デザインと思っているのかもしれない。でも、靴下はなかなか良い品で 3～5 足で 10 元（130 円）、1 足 30～40 円だ。日本で安売りの靴下よりも質がいい。私は必ず買って帰る。

北京に「秀水街」という名の地下 3 階地上 5 階のデパートがある。そこの品物は全てブランドものの偽物である。ローレックスの時計、グッチの靴下、ルイビトンのバック、ポロのシャツ、バーバリーのポロシャツ、アイフォンなどの偽物が飾ってある。値札は、海外の通常の値段と同じだ。だから、交渉して 1/10～1/5 の値段まで下げさせて購入する。実際に品物も悪く、ローレックスの時計は、数日で動かなくなる。それぞれの店には、「この店の品物は本物であることを証明する」と書かれた証明書が飾ってある。しかし、どの店のものもおかしなことに全て同じデザインだ。証明書でさえも偽物なのだ。

また、偽物にはランクがあり、上のクラスからスーパーA、A、B、C がある。スーパーA や A ランクの品物は鍵が掛かる特別の部屋に置いてある。これを売る店員は、「このハンドバッグは、偽物でもスーパーA だから、本物と同じ。だから 1000 元（約 1 万 3 千円）だよ」と自慢して売り込もうとする。スーパーA は、製造した工場の完成品で横流しされたもの、A は、工場から材料が横流しされて別のところで製造したものである。

秀水街では時々、中国公安の抜き打ち捜査があり、その都度閉鎖されるが、数日後には再開される。捜査は外国に対するポーズであり、公安が偽物デパートから賄賂をもらい、ぐるになっている。

北朝鮮に近い延吉の町で朝鮮人参を買ったが、何故かアメリカの国旗のシールが貼られていた。朝鮮人参だから北朝鮮か中国で栽培されたものであるとわかっているにもかかわらず、米国国旗のシールを貼るその理由が理解できない。おそらく、米国の物はなんでもいい、だから朝鮮人参にも米国の国旗を貼れば、高い品質の朝鮮人参だと思われるという論理だと思う。全く理解に苦しむというか笑ってしまう。それでも私は、当然中国産の朝鮮人参だと思って買って食べている。

パソコンソフトや音楽 CD の偽物も多い。町のスーパーの出入り口近くに、段ボール箱があり、おそらく数千枚にもなろう DVD・CD が堂々と売られている。公安も賄賂をもらっているから取り締まらない。

偽物の極めつけは、100 元札（約 1300 円）の偽札だ。偽札はいつもあるわけではないが、時には多量に出回ることがある。日本の友人が、知らないうちに 7 枚保有していた。その偽札には、すかしはなくすかしを真似た印刷、真札には目印の凹凸があるがそれもない、同じ番号のものが何枚もあったり、色が少し違ったりする。日本では、偽札を銀行などに持って行けば交換してくれると聞いたことがあるが、中国では、偽札を持ってしまったら、（銀行で交換してくれなければ、）使うこともできない。中国人は偽札が普及していることをよく知っていて、100 元札を受け取るときは、必ずすかしを見て、凹凸部分を確認する。それも一枚一枚だ。だから、偽札の場合には受け取って貰えない、トランプのばば抜きのようなものだ。2013 年 2 月 7 日の共同通信ニュースによると、中国広東省の公安当局は 6 日、同省内で人民元札の偽造工場を摘発し、2 億 1 千万元（約 31 億 5 千万円）分の偽札を押収、37 人を拘束したと発表した。中国紙幣が粗雑であること、偽札偽造の集団がいることが大きな問題である。

全てニセの100元札

中国人は、偽物でも質がいい物であれば、うまく生活に取り入れ、悪質の物であれば排除する生活力を身につけている。このようなしたたかな中国人に著作権を守れ、偽物を作るなと言っても、彼らにはそのような声に耳を傾ける気持ちは全くないと言っていい。売る側も買う側もともに利益を享受している社会、世界の法律の基準を守らない集団になっており、犯罪の意識がない。中国は今後、世界経済規模第二位の国家としての責任を果たすべきであろう。

5　立派すぎる建築物や物は何のためのものか？

北京の天安門広場から東西に広がる道路がある。中国が威信をかけて作った道路であり、その道路に沿って政府系の威厳がある立派な建物が並ぶ。ところが、その道路から 100m ほど入ると、歩道のタイルは壊れてデコボコ、お店の下水から流れて出た臭いがする水たまり、老朽化したボロアパート、衛生的とはいえない大衆食堂（日本人には食べられないような店）がある。夕方になると短パンで、上半身裸で歩く人も見る。表通りと裏通りの差があまりにも大きすぎる。

中国では、用途の規模を遥かに超えて大きいものがある。中国軍の駐屯地を正面玄関からみると、門構えが極端に大きい。門なのに一つのビルディングのようだ。（写真）

唐山に所在する軍の司令部

田舎の五つ星ホテルのロビーは、日本のホテルのロビーの比べて遥かに大きい。ホテルには、お客はほとんどいないのに、ロビーだけが馬鹿でかくて、反比例して閑散としている。そこに置いてある一人用のソファーも馬鹿でかい。肘掛けが座る部分と同じくらい大きい。肘掛けは腕を添えられればいいと思われるのだが、お尻も載せられるくらいに大きい。なんのためにそのように大きく作るのか、日本人の私にはまったく理解できない。大きいことが、そこに座る人の権力を見せつけるのに適しているのかもしれない。（写真）

石家荘にあるホテルのソファ

地方都市には、大きなデパートがある。1 階には海外の化粧品売り場、その上には、外国製の時計・スーツケース、高級なスーツや靴の売り場がある。だが、それらを購入している人は極めて少ない。このデパートの経営は成り立っているのか不思議でならない。中国人が品物を買っているのは、市やスーパーマーケットがほとんどだ。北京の西単（日本の銀座に相当）の店には、女性用のブーツが売られていた。長時間、どれくらい売れるのか見ていたが、それを手に取って見る人もいない。飾ってあるだけで、購入する人はほとんどいないのではないかと思う。日本の女性は、ブーツを何足も持っていると思うが、北京の町で、ブーツを履いている中国人女性をほとんど見ない。

地方のデパートもブーツを売っている店も、品物は飾っているだけのようであり、見せかけや虚栄で建設されたのではないかと思う。

地方都市に行くと、マンションの建設ラッシュだ。そこに、誰が入るのか、人は入るのか心配して見ていたことがあるが、たくさん売れている気配はない。そこに入居する人もあまり見ない。中国のマンション建設の印象から、近い将来バブルがはじけると思う。だが、中国政府は、バブルの実状をうまく隠し通すだろう。

6　中国では賄賂を出すのが当たり前？

中国での賄賂は常態化している。中国長期在住の友人に聞いたところ、中国で事業を興すには許可をもらわないとできない。許可をもらうために市政府に申請する。事業の規模によって村・県・市・省・国のレベルになる。それぞれのところに申請書を提出すると、申請書の書類は、積み重ねられる。許可を得るため賄賂を出すと、積み重なった書類の一番上に載せられ、書類の手続きは開始される。賄賂を出さないと、提出した書類の上に、お金を払った人のものが置かれていくので、書類が下の方に移動していく。そして、いつまでも手続きが進まないので許可が下りない。

許可が下りないので、なぜか理由を聞きに行くと、「誰々さんに相談してみなさい」と言われ、その人のところに行くと、「お金をいくら払いなさい」と言われる。そのお金を

払うと許可が下りる。市・郡・省などの政府の役人は、直接お金をもらわないので、その人が賄賂で逮捕されることはない。仲介をした人は政府の人間でないために、賄賂を受けたことにはならない。役人の賄賂は、内部告発か権力争いに負けない限り明るみには出ない。

お金の渡し方には、上記の他、例えば月餅というお菓子の箱の底にお金を入れて渡すこともある。中国の笑い話で、自分のところで仕事をとろうとして、影響力のある人に、月餅の箱に札束を入れて賄賂として渡した。受けた人がまたその上の上司に渡した。受けた人がその月餅の賞味期限を見たら切れていたので、その家のお手伝いさんに渡し、お手伝いさんがその箱を開けたら、札束が入っていて驚いて困ったというものがある。日本の水戸黄門の時代劇で、悪の商人が悪代官に、お菓子の箱に小判の束を入れた賄賂を渡す場面があるが、現代の中国では、同じようなことが行われている。

その他に、高級料理で接待し、高級酒をお土産として渡すというのがある。

県警の人から聞いた話だが、日本の VIP が中国を訪問すると、高級料理と酒と女で三日三晩接待漬けにされる。中国側の要求を聞かざるを得ない。中国に不利益になることを言えなくすることを狙っているらしい。

国の仕事で中国に行くことがあったが、毎晩、酒と中華料理を食べ放題、飲み放題だった。ただ、豪華そうな中華料理は口に合わず、酒は中国のビールと白酒だったので、接待されているという感じはなかった。まずい料理を毎日食べさせられているという印象だった。

市政府の役人の給料で、身分に合わない立派な家や自動車が購入できる訳がない。莫大な賄賂を得ているから購入できる。また、そのお金で、子息を外国に留学させて、日本でも家を購入する。そしてその家に住まわせる。中国の土地を所有できるのは約 50 年と言われ、永久に自分の所有物ではない。日本で購入した物件は、永久に自分のものになる。自分の不正で失脚したときは、家族を外国に所有する家に逃がせばよい。

北京空港のモノレールが故障して、外国に出国する人達がターミナルに行けなくなり、空港の移動経路が混雑して、身動きが取れなくなったことがある。その時、我々業務の通訳が交渉してきますと言って、どこかに立ち去った。すると、話が付いたのでこちらからどうぞといって、どこかの通路を使って、ターミナルに行くバスのところまでたどりつけた。そして、バスに乗り検査所にスムーズに行けたのだ。後でその通訳に、「あんなに混雑しているのにどうして我々だけが行けたのか」と聞くと、「交渉次第ですよ」と答えた。たぶんお金で便宜を図って貰ったのだろう。

7　会社の内部にも共産党社会があるのか？

20 年前に中国上海に進出している中堅電子部品メーカーの工場を見学したことがある。そこで、日本人の案内者から聞いて強く印象に残っていることがある。それは、「会社の中に会社経営組織以外に共産党の組織があって、経営者が入れない共産党の会議が行われて

いる。経営者は、そこで何が話されているのかまったくわからない」と説明を受けた。また、その会社の社員の月給は、会社が社員に直接渡すのではなく、一端、会社の共産党の組織に渡して、共産党がその中から一定の金額をピンハネして、社員に渡す。中国の市場経済主義というのは、会社経営者が考えているとおりにはできなくて、共産党の意志が入り、共産党にお金が入る仕組みになっているのだと、その時私はそう思った。

20 年経過した今年の 1 月に、電子版産経新聞ニュースで、上海の日本電子部品メーカーの社長を含む日本人 10 名が、社員に取り囲まれて軟禁された記事と会社の写真が掲載されたので、前述の事を思い出した。会社経営者が会社内部の中国共産党員の意見を聞かなかったか、党員の身分保障の件で、そのようなことになったのかもしれないと見学したときの説明を思い出した。中国では、共産党が政治的コントロールをするのみで、経済に関して特に会社経営は、経営者に主権があると考えていたが、共産党は会社経営を、そして資本主義をもコントロールしている社会なのだと実感した。

8　中国ではとんでもないトラブルに遭遇するのは何故か？

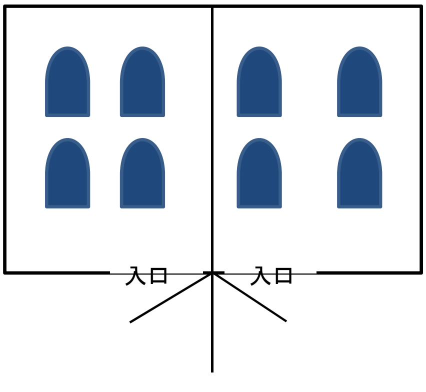
(1)　突然のバス火災

仕事では作業現場にも中国外務省や国防部調達のバスで移動した。一度、バスが作業現場に到着し、全員が降車後駐車場に移動中、突然炎に包まれたことがあった。到着の時間が遅れていれば、我々チームの半数は黒こげになっていたかと思うとぞっとする。日本では、乗っていた貸し切りバスが炎上することなど聞いたことがない。

(2)　日本人の誰もが想像できない公衆トイレ

北京から省の都市へは、航空機で移動した。その後、市都へは、バスで 5～6 時間、ある時は 8 時間ほどかけて移動する。バスで移動する時には、中国大陸の広大さと、どこまでも続く平原には、ウンザリというか、驚かされる。省都から市都へ移動するときは、サービスエリアはない。寄るのは、中国石油などのガソリンスタンドだ。そのトイレが壮絶きわまる物である。ボットン便所で、入り口のドアはない、中に入ると一つ一つの仕切りはない。大小の区別もない。便器と同じ穴が 3～5 個開いているだけだ。排泄物の堆積量も驚くほどすごい。女性用も同じだ。これで近代国家と胸を張れるのか。新幹線の整備も自慢かもしれないが、このトイレは国家の恥だと思う。北京から派遣された中国人女性兵士でも、使用するのをかなり躊躇していた。男性兵士も、こんな様子を日本人に見られて恥ずかしそうにしていたのが印象に残っている。

中国のガソリンスタンドのトイレ（上から見て）



⑶　真っ赤に熟れたスイカ

中国では、一年中スイカが食べられる。時々真っ赤に熟れたスイカでもスイカの美味しい味がしないことがある。その時は不思議に思っていたのだが、2～3 年前に、中国のスイカが爆発して割れることが話題になった。その理由は、短期間に栽培するために、スイカの苗に特別の薬を散布するらしいのだ。その量が多すぎて、成熟する前に、爆発して割れたというのだ。我々がホテルで食べていたスイカは、おそらくこのような方法により栽培されたものと推測できた。つまり、農薬を多量に投入されたスイカを食べていたことになる。中国の食品には、各種薬品が混入しているといわれている。特に有名になったのが、赤ちゃん用の粉ミルクだ。中国では、知らないうちに農薬やホルモン系の化学薬品が多量に入れられていたものを食べている可能性がある。

⑷　高層階ホテルのエレベーターの混雑

20 階建て以上の高層階ホテルだと、エレベーターは 5～6 機ほど設置されていないと、大変混雑する。中国で経験した高層階ホテルでは、3 機の内 1 機が故障していて、2 機だけしか動いていなかった。2 週間ほど滞在したのだが、故障しているエレベーターは復帰することはなかった。したがって、レストランに移動するために、20 分以上も待つことになった。中国では、高層ホテルでなくても、低層～中層階ホテルでも、狭い小さいエレベーターが 1 機しかないところが多く、混雑する。たまに、エレベーターの表面はあるのだが、扉が開かない見せかけのエレベーターがある。建物の外見は一見豪華だが、内容はお粗末といった建物が結構ある。

おわりに

私は、中国に滞在し人と接して、「親しみやすい心」「思いやりの心」を感じた。現実にそのような心を持った人々が多いと思う。だが一方で、中国国内には、大気汚染・水汚染が桁違いにひどい事、偽物が氾濫していて中国人が中国で売っている商品を信用していない事、賄賂が隅々まで蔓延していて誠実な人々に諦めの感情が起きている事、表には権威主義的な見せかけで作られている建物・物が多い事、表の富と裏の貧困が同じ場所に同時期に見られるなど、とんでもない事に遭遇して驚きさえも感じる。中国は本当に世界第 2 位の経済大国なのかと疑いたくなる。

前述したように中国は容易に解決できないとてつもなく大きい問題を抱えこんでいるのが実情である。そのため、見栄やごまかしなどの虚像で問題を隠し、そして国民の大きな不満が爆発しないように、周辺諸国との間に領土問題を創造して（石油資源確保の目的もあろうが）、日中間の歴史問題をあぶり出し、国民の不満をその方向に向けてそらしている。これが、「内政問題を外交問題にすり替える国家戦略」と言われる由縁ではないだろうか。

2009 年、中国の英字紙チャイナ・デーリーが伝えた世論調査では、回答者の 91%が「政府が発表する統計を信頼していない」と答え、米ヘリテージ財団の研究員は統計が中国共産

党によって『つくられている』という疑惑をぬぐい去れない」と語った。私も、前述した中国の実状を見るかぎり、中国が発表しているデータには疑問を持たざるを得ない。中国人も外国人も、中国が作って見せている虚像や作られているデータでごまかされていると思う。

中国がこのような国家戦略を展開していると、ゆがんだ国民が増加し、かえって周辺諸国から嫌われる国家になってしまうと思う。私が感じ取った中国国民の親しみやすさ・思いやりの心を大事にして、周辺諸国との信頼関係を構築したほうが、発展の速度は遅くとも、外国に信頼され尊敬される国家、名実ともに世界経済第二位の国家になれるのではないか。